

## もてなしの心

「さっきの人、一体なんやろ。ようするわ。うちらできると思うか。ようせんで」――  
 昼下がりに関西弁の女子高生三人が長崎の築町電停で立ち話。驚いてる様子だ。

盗み聞きしてみると――その「さっきの人」は中年の女性らしい。出島に行く彼女たちが道を間違えないようにと、自分も諏訪神社下から電車に同乗。本来なら近回りして行けるのに、彼女たちに説明の後、乗り換えて長崎駅方面に行った、という。

県内にも秋の観光客が目立ち始めた。特に長崎市内での修学旅行生は、小人数での自由観光が盛ん。だが土地の事情にうといたため、「旅は憂いもの辛いもの」ともなる。その中年女性はまさに「旅は人の情け」を地でいった。

来年は日蘭交流四百周年。観光地・施設に加えた、一過性の記念事業だけではあまりにも表向きすぎる。案内板、標識、地図、駐車場など多方面からの「もてなしの心」が

求められる。

長崎は人を呼び、人とともに栄えてきた長い歴史がある。名所、旧跡は写真に撮れる。だが人の心は撮れない。旅人の心の中に焼き付けてもらうしかない。

旅には数多い出会いが待っている。しかし、思いもしないその土地の人情に感動することが多い。「長崎に行けばホッとすると、あちこちで聞きたい言葉だ。十数回長崎を訪れた歌人の一人、吉井勇はこんな歌を詠んだ。

「世を厭へばいにしへびとも旅ゆきぬわれも世を憂く長崎にゆく」

平成十一年九月二十一日『水や空』（長崎新聞）